

支援の在り方提案

AMDA菅波代表
総社で講演や対談

総社市では官民37団や「絆」を同市三輪体が連携して「復興支援プロジェクトそうじ」開催。国際医療博覧



被災地支援の在り方について対談する菅波代表（右）と片岡市長

ティア・AMDA（岡山聡一総社市長が対談。片岡市長は、連携波茂代表の講演などがあつた。

菅波代表は、AMDAが震災直後から現地へ支援を始め、補助スタッフを被災者の中から雇用したエピソードを披露。「援助される側にもプライドがある。『必要とされたい』という気持ちを満たしてあげることが大切」と述べた。

市民一人一人ができる支援については「復興とはお金を回すこと。現地へ家族で旅行に行つてほしい。被災地を見れば、子どもが、わが身のありがたさに気付く」と話した。続いて菅波代表と片

岡山聡一総社市長が対談。片岡市長は、連携

協定を結んでいるAMDAの活動を支援するため、現地に職員を派遣したり、灯油や電気自動車を送った経緯を紹介し、「協定を結んだ。（森元俊一朗）



震災発生直後の午後2時46分、表町商店街で祈る女の子

「悲しさこみ上げる」

震災発生時刻に
各地で市民合掌

「決して忘れない」
震災発生時刻の午後2時46分、岡山市な

どで黙とうが行われた。商店街、地下街、図書館で…。市民らが犠牲者や被災者の思いに寄り添った。

同市・表町商店街。黙とうを促すアナウンスが流れると、女の子がしゃがみ込み、小さな手を合わせて一心に祈っていた。衣料品店経営長山敬右さん(66)は

「被災者の心の痛みが、少しでも早く治まるように」と願いを込めた。岡山一番街（岡山市北区駅元町）でも、買い物途中の人たちが立ち止まり、目を閉じた。倉敷市、会社員女性(30)は「恐ろしい目に遭つて亡くなった人のことを考えると、悲しさがかみ上げてくる」と涙を流した。

県立美術館（岡山市北区天神町）や県立図書館（同丸の内）でも職員や訪れた人たちが黙とう。県庁、岡山市役所などは、震災犠牲者への弔意を表す半旗を掲げた。

（秋山昌三、舟越俊司）

絆かめ復興願う